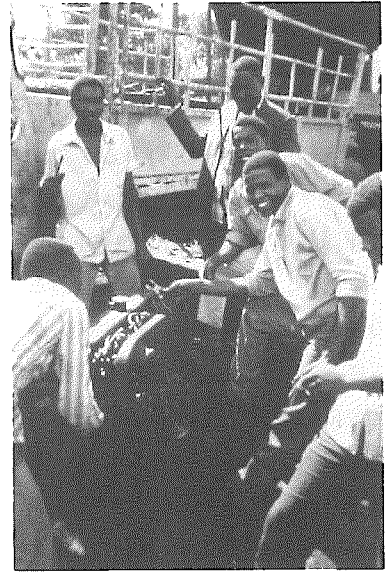


調査の戦略と倫理

ケニアのある町より

上田 元



社会調査は、調べる者と調べられる者の人間関係の上に成り立っている。したがって、同じ現象を追う場合でも、研究者の性格や人間関係のもちかたに応じて、結果に質の違いが生じて不思議ではない。とはいっても、研究者の人となりや調査に際して調節するのは困難だし、もとより、いかに調節すべきかを定めた指針もない。調査におけるこうした人間関係に由来する問題は、人類学のような場合を除いて、許容範囲内の誤差とみなされるか、影響の評価できない雑音として片づけられてしまうのだ。教科書が扱うのはせいぜい調査倫理止まりであり、しかもそれは調べる者の方向から人間関係を結ぶ際の価値規則でしかない。そこでは、調べられる人々に対して研究目的を偽ったり、現地社会のなかに対立を生むことなどが、慎むべき行為とされている。だが、調査の実際は、こうした倫理上の心構えと研究目的の充足を均衡させ、戦略的に人間関係をつくっていくことの連続であろう。本稿では、調査におけるこの人間関係の問題を、従来インフォーマル・セクターと呼ばれてきた屋外小規模経済活動を対象に私がケニ

アで行なっている研究を振り返りながら、考えてみたい。

1 調査者の身分と目的

前回の調査は1991年の2月から8月にかけて行なった。目的の一つは、農村に囲まれたある町において、路上や空き地で営まれている自動車修理などの小規模事業につく人々との社会関係、とくに仕事に関連して結ばれている関係を調べることであった。こうした経済活動が、人々に雇用機会を与えて貧困を緩和するとの期待から、ケニア政府は80年代後半より、これをジュア・カリ（スワヒリ語で「暑い太陽」、転じて「屋外小規模事業」）と呼んでその奨励を図っている。これに並行して、ジュア・カリ従事者自らの組織化も、政府からの経済的援助を当てにしながら進んできた。こうした政府による彼らの活動の承認の意味、ひいては彼らを主体とした雇用・貧困問題の解決の可能性

写真：大型車のエンジンを修理する人々

を調査しようというのである。

調査の始めにまず問題となるのは、自分の身分や研究目的をどう説明するかである。これらを故意に隠すか、偽ることは、それが調べられる人々に悪影響を及ぼしかねないときには許されないというのが、第1の調査倫理であろう。とくに調査のスポンサーが誰か、敵か味方かというのが、彼らにとっては大問題である。私の場合、自分が奨学金に頼る学生で、学位取得を目的とした純粹に個人の研究をしていることを、主な調査対象とした屋外自動車修理工にそのまま説明した。これは、日本の自動車会社や、政府、援助機関との私のつながりを期待した人には気の毒なことであったが、同時に彼らは私を自らの利害に無関係な人物とみなしたように思う。彼らにとって私の重みは減ったが、その分、お互いに気は楽になった。

他方、研究目的については、私の身元が一度分かると、しつこく尋ねる人はいなかった。大抵の場合、庶民にとって重要なジュア・カリの勉強をしているのだ、ケニアのことを日本人に知らせるのだ、という説明で充分だった。ところで、調査対象となった人々の一部は、政府から資金や作業場などの援助を獲得する受皿として、自らを組織しつつある。ここで、ある組織に加入するかどうかは、人々にとって政治的な決定である。こうしたなか、正直にジュア・カリ奨励政策や人々の組織化が調査項目に含まれていると公言するのは、調査対象そのものを刺激することになり、研究の戦略上まずい。たとえば、ある人物が組織に加入していない理由を詮索することは、その人の組織に対する考えかたに影響して、加入の動機を与えてしまうかもしれない。さらに、こうした現地社会へのお節介は、調査倫理上、研究目的を詳述しないこと以上に問題であろう。だから、こちらからは関連の話題には一切触れず、それを世間話の

なかから聞き分けることに徹した。これは、彼らの利害に直接関わることを避けつつ、まず少なくとも彼らの社会経済状況に関する差し障りのないデータだけは確保しておくための戦略としても、必要なことであった。

2 調査者の立場

調査の始まって間もない頃に、県の職員に伴われて自動車修理工を幾人か訪ねたことがあった。調査地点である町の中心部は狭く、この訪問は、既に顔見知りとなっていた修理工に目撃された。彼らのうちに、私と行政・権力との関係をめぐり疑念が生じたかもしれない。また同じ頃、私はある組合の構成員を調査し始めていた。これは、研究がジュア・カリの組織化に関わるので当然である。とはいいながら、路上などで好き勝手に働いている大勢の人々の間に分け入って調べていくことなど、まずは組織のような人脈をたどる以外、不可能に感じた。このことも、第1に組合員の調査へと私を走らせた。組合員名簿を頼りに、私は彼らを一人ずつ、芋づる式に捜し始めた。だが、すぐ隣で作業していても、お互いをあだ名でしか知らないこともあり、この人捜しは思ったほど容易ではなかった。また人だかりができることもしばしばで、ここで人々は、私に捜されている、いないに差別を感じ、その理由を考えたに違いない。疑問をおつけられた場合は、「調査のやさしそうな組合から始めているが、慣れたら他の人にも質問する」といいわけし、そのとおりにした。

調査者としての私の立場は、権力や人々とのこのような関係のもちかたと、人々によるその解釈のしかたに依存している。この人間関係については、いくつかが気を配ったことがある。まず、行政との接触は、緊急に必要な場合を除き、調査の最

後にまわした。次に、調査のアシスタントは雇わないことに決めた。データの信頼性もさることながら、人々と自分の関係をなるべく単純にし、また自分が不在のところで調査をめぐって問題が起きるのを避けるためであった。また、個人情報を第三者から聞き取るのは、こちらからはなるべく避けた。それが自分の立場を含め、人間関係に悪く作用することを恐れたのである。いずれにせよ、なるべく誤解の根を断つことを心がけた。

とはいえ、顔見知りになり関係が安定し、彼らの職業観に触れ、現地の常識とのすり合わせを経験するにつれて、こちらの自由裁量の幅も広がる。人々が昼間から酔っ払っている仕事仲間に冷たい視線（と私には感じられた）を送りながら、あんなのとかかわり合いになるなど私に忠告するのを、私は彼らの良識と受けとった。また、彼らと食事を共にすることもあったが、遠来の客である私には代金を払わせないことが多い。これには恐縮していたが、ある日もやや高級に、二人で肉じゃがのようなカランガと、チャパティとチャイを平らげた。最後に連れは40シリングほど（当方で約200円）のお札を出して帳場へいこうとした。私はせめて自分の分だけでも払うよという意味で彼の行為をさげすみたつもりが、彼は一転、じゃあ遠慮なくと、私を残して店を出ていった。彼は金回りのよいほうだったが、やはり、割り勘という概念をもたないのだ。現地の常識にしたがって、たとえば相手の食事代をもつことは、生活者としての私の立場を安定させるのに役立った。このような経験の積み重ねは、失礼な調査をしていないかを反省する手がかりともなった。

3 社会関係の解読

質問票を用いた通りいっぺんの調査のあとは、

多くの時間を参与観察に割いた。自動車修理工は、日本でならとうに廃車となっているはずのボロ車を、壊れた車から外しておいた有り合わせの部品も混ぜながら直していく。彼らは機械、配電、溶接、板金塗装、内装、蓄電池再生といったように独立・分業しているが、同じ客に共同で対することもよくある。溶接の場合は、アセチレンや酸素のボンベの供給元に高額の保証金を預ける必要があるため、誰もがができるわけではない。これに対して、ごくわずかの道具で機械まわりを修理するスパナ・ボーイと呼ばれる見習もいて、こちらは人数が多く、小・中学校を出たばかりの若者中心である。4～5月と10～11月の雨季には繁盛する。この時期は車が傷むし、ぬかるんだ路上をあえて押しながらエンジンをかけようとする人が減るからだ。

修理工の事業主は少なくとも数人の得意客をもっていて、人の客を無理に引っ張ってくるようなことはしない。したがって暇なときは、軽トラックの荷台の縁に向い合って座り、私を交えて今の広島や長崎に人は住めるのか、日本人はみなカンフー映画のような離れ技をするのか、といった話になる。私は、映画にはトリック撮影が含まれていることを白状したが、強いと思われている日本人、あるいは東洋人がみくびられないように、釘もさしておいた。こちらのほうは、私一人でなく、この国にやってくる人一般の安全に関わる調査倫理かも知れない。

参与観察の間のこうした形式張らない会話を通して、社会関係の調査も試みた。このうち、親戚や隣人関係が公になったからといって困る人はあまりいないが、仕事をめぐる人間関係のほうは、人々の経済・政治的利害が絡むので微妙な対象である。例を二つ挙げてみよう。

まず、ある社会関係をそのままの形で述べるこ

とが自分に不利に働くので、あるいは仕事仲間の前では憚られるので、曖昧な、または事実を反することをいう人がいる。たとえば、地主に地代を払い空き地を借りて作業する自動車修理工が、自らの地主との関係を言い表す場合がそれである。調査の結果、ある作業用地では、地主に直接地代を払う代表格の修理工数人と、この代表格を通して間接に、しかも不定期に払う人々の区別があることがわかった。だが、間接的店子のほうは、当初この区別を明らかにしなかった。彼らにとっては、地主との安定した関係が操業に不可欠である。これが崩れると、路上での操業を強いられ、そこで町役場の取り締まり対象となってしまう。だから、地主との関係が実態以上に強いことを私に、さらに周囲の仕事仲間に印象づけ、自分の立場の安定を強調したのではないかと思う。こうした取り繕いは、いろいろな人と話すうちに、矛盾となって表に出る。だが、こうして判明したデータは、その後の調査においても、論文の執筆や政府への報告書の提出に際しても、当事者に不利益とならない形で用いなければならない。

取り繕いの問題と同じように微妙となるのは、大半の人々が普段は意識していないが、潜在的には重要な社会関係を調べようとする場合である。今回の調査では、ジュア・カリの人々の組合組織がそれに当たる。こうした組織は、すでに述べたように政府からの援助を目当てにつくられたものだが、私が入った町のようにその援助がなかなか実現しないために活力を失い、日頃は忘れられかけている場合もある。しかし、資源獲得経路として見込みが出てくれば、それはいつでも活性化しうる。さらに、こうした組織は一つではないから、この活性化の一面は、資源獲得競争となって現われるはずである。このような潜在的な社会関係は研

究主題として重要だが、それを刺激するのは、調査の倫理上も戦略上も注意を要する。ときには、自分はある組織の中心人物だったが、政治家が介入したので脱退した、などと打ち明ける人に遭遇することもあるのだ。組織をめぐる人々の政治的勢力関係ははっきりしないうちにこうした問題に深入りするのは危険なので、これは状況を見ながら少しずつ調査しているところである。

おわりに

意識的な取り繕いにせよ、利害の対立にせよ、その裏に潜む社会関係は、人々の経済条件を左右しうるので、調べる側にとっては意義深い。だがこれは、調べられる側にとっても、いじられるのが迷惑なほど重要でありうる。振り返ってみると、多くの場合、この相反する立場の妥協を探る戦略が、現地の人との関係のもちかたを規定していた。そのなかで、調査倫理は全く忘却されていたわけではないが、それを直接の行動規準とした場面はあまりなかった。だが、茫漠とした倫理というものをつらと、それさえ守れば全ての調査は潔白であると自己正当化することこそ、独善的で倫理に反するといえよう。それにしても、部外者として調査することの問題は、依然として残ったままである。アフリカに限らず外国社会の研究の場合、これに異邦人としての研究という事情が重なる。帰国して現地に与えた影響に責任をもたない態度が倫理上の問題となるし、さらに政府の判断であれ「外国人には許されない」調査を実施することにも、議論の余地がある。誰のための調査・研究なのかを反省するなかで、各自その正当化をしていくほかないのだろうか。

(うえだ・げん／東北大学理学部地理学教室)